

「論文」

箕隅御嶽の由来譚を読む

——旅の儀礼と伝承の発生基盤に関する一考察——

A Study of the Legends Related to Mimusshin

木村 淳也

Kimura Junya

はじめに——琉球における航海の祭祀

日本の南端に浮かぶ有人島五十四島と、その他無数の小さな島々から形成される沖縄県が、かつて琉球王国と呼ばれた海洋国家であったことは説明不要の事実である。航空機の存在しない時代、当たり前前のことではあるが、これらの島じまは船舶の航路によって結ばれていた。琉球王国の海域内では、貢納品である穀類などの物資の運搬や、王府役人の移動、百姓の日々の活動において、中型の馬艦船をはじめとして、和船、剗船（サバニ）など、様々な船舶が活用されていた。

かつて中継貿易国家として大航海時代を過ごした琉球は、もちろん中国や東南アジア、日本といった外洋にも頻繁に出帆したが、それらの航海は難破・遭難といった危険を常に伴うものでもあった。中国への進貢の渡海を意味する「唐旅」が「死」の比喩表現となったことから、その危険度の高さをうかがうことができる。

そのため琉球においては「旅の儀礼」、すなわち航海の安全を願う儀礼・祭祀が数多く挙行された。航海へ出発する前に、

船員当人が寺社に祈願詣をするのはもちろんのこと、その親族らも彼らが船旅から無事戻るようにと、毎日のように寺社参詣し、夜を徹して歌舞を奏した。しかしながら、必死の祈りも虚しく、不幸にして難船してしまった場合、船員らはどのような対応をとったのだろうか。

たとえば、一八九四年（光緒十九年、明治二十七年）、石垣島から蒸気船・寧静丸で沖縄島へ向う途中に遭難した八重山の頭職、宮良親雲上三宗の日記である『頭役被仰付候以来日記』（七月四日）には、以下のような記事がみつかる。

【資料1】宮良三宗『頭役被仰付候以来日記』（一八七二年）

今日漸々風波猛敷吹起終に大風吹出火輪船火焼方も不相叶風俣漂着嶋影も不相見へ十方を失候付道そいつ地とも着岩いたし候方に御守護被為在度普天満權現并觀音堂沖之寺波上寺四御前へ向御立願仕候折猶々風雨猛敷終に大風相成船艦表左右之厠并中等之家我々相住居候所波に被打破及危船萬死一生之涯立至りそのひやん御嶽弁財天弁之御嶽住吉めい之しんへ御立願仕猶又髪を切海上へ祭上聞得大君御殿へ龍樋之御水上度と之御立願仕積入荷物打捨漸々風波靜相成翌四日夜二更之比にても候半向に嶋影相見へ候：（1）

右記史料から、難船時の沈没を回避するためになされた行動を整理すると、

- 1、普天間權現、首里觀音堂、沖寺、波上社の四カ所へ立願
- 2、首里・園比屋武御嶽、弁才天堂、弁ガ嶽、住吉、めのしんへの立願

- 3、髪を毛を切つて海上に祭る
- 4、聞得大君御殿へ首里城の龍樋の水を献上するとの立願
- 5、積み荷を船の外へ投げ捨てる

となる。また一八一九年、薩摩藩主・島津斉興の、中將への昇叙を祝う使者として王府から派遣され、硫黄島島近海で猛烈な暴風雨に遭い帆を損傷して漂流した運天按司朝英らも、下記のような祭祀のプロセスをとったことが、豊見山和行の論文²⁾から伺うことができる。

- 1、髪を切り天に祈る
- 2、聞得大君への祈願（龍樋の水の献上）
- 3、普天間権現への祈願（七日間の参拝と焼香）
- 4、弁才天への祈願
- 5、天尊への祈願（終日の焼香）

この両者の事例には七五年間の開きがあり、祈願対象となる御嶽・寺社など数や、挙行順序に多少の変動はみられるが、神仏への祈願、聞得大君への立願、荷物を捨てるなどの行為は共通していることがわかる。またその際に、髪を毛を切つて海上に祀る、というのが一般的であったようだが、この祈願様式は日本船や唐船の遭難時にも見えることから、東アジアに共通する習俗であったと言えるだろう。³⁾

一方で、難船時の祈願対象である寺社だが、国王が中国への進貢船や綾船（薩摩へ派遣された官船）の出発前に、自ら参詣して航海安全を祈った場所とも大方一致している。国王は末吉宮、識名観音堂、普天間宮、弁が嶽、弁財天堂などへ参詣し、

船旅の安全を祈願していた。

また、琉球の最高神女である聞得大君も、王と同様、国家安寧や航海安全等を祈願したが、同時に自身が祈願対象、つまり航海守護神的存在としてみられていたことが、遭難時の祭祀からうかがえる。琉球の船頭だけではなく、大和の船頭らも難船時に立願して、これが叶うと龍樋の水や青銅などを聞得大君に捧げて結願したという事例もあることから⁴⁾、ひろく琉球海域の守護神として、船頭達から信仰をあつめた存在であったといえるだろう。

ところで、【資料1】の宮良当宗の日記には、航海守護の祈願対象として「めのしん」と称されるものが見える。これは、那覇市南部の鏡水（旧・小禄村儀間）にある箕隅御嶽（聖所）を指している（以下、「箕隅御嶽」に表記を統一する）。この御嶽は、小高い丘陵にある前後二つの洞窟を本殿として成り、いまも祭祀が続けられている。平敷令治の調査によると、前の洞窟は、旧三月四日のヌヌウグアン（布の御願）に際して村の婦人たちが揃って拝み、アシビ（歌舞）をしたという。また旧儀間村関係者は、洞窟中央のフトウキ（仏）に旅の加護・子安を祈願した（祈願に際し赤い腹掛けや小さな着物が供えられた）ともいう。さらに、後ろの洞窟に関しては、近代まで「宗家筋が拝んでいたという」としているが、いずれの宗家かは明示されていない。⁵⁾

沖縄の説話集『遺老説伝』（一七四五年）には、この御嶽に関する伝承が以下のように記されている。⁶⁾

【資料2】『遺老説伝』附卷 第一三九話

小禄郡儀間邑之西、有一山崗。峩然高秀、樹木最茂。下有洞

窟。形似箕器、深闊幽雅似乎神在。一日、有人、奉正觀音像于其中、以致尊信。至聖至靈、禱無不應。至乎近世、日本諸舵工、喜損資金、創造拜殿。且復有一洞、亦供養賓頭盧。今、無有人崇信焉。

小祿間切・儀間村の「箕器」に似た靈驗あらたかな洞窟に、いつの頃からか誰かによって正觀音像が安置され御願の対象となった。この御嶽の利益はすばらしく、近世に至ると日本の船頭達によって拝殿が寄進されたという。また近くにはもう一つ洞穴があつて、そこには「賓頭盧」が供養されていたが、今の人は拝まない、ともある。

一読してわかる通り、この説話には前述の平敷氏の調査により報告された「航海の守護」や「子安」の機能は記されていない。箕隅御嶽が海岸に近い場所に所在していることを考えれば、確かに航海神にも成り得るだろうが、そういった地理的環境を示すのみでは論理的な説明とはならない。さらに、なぜ子安の機能が発生したのかを考えるには、他のアプローチが必要になるだろう。

1、琉球の基層信仰——重層化する航海神

箕隅御嶽の伝承の変化を考察する前に、『遺老説伝』所収説話の、洞窟にいつの間にか仏像が置かれて御願の対象となった、という語り起こしについて考えてみたい。たとえば、本話が収載された『遺老説伝』の、巻一・第三五話には、これに類似する普天間宮の由来譚がみつかる。この普天間宮とは、「はじめに」でも見たように、琉球における航海守護の祈願対象となったも

のであつた。

【資料3】『遺老説伝』巻一 第三五話

普天間邑之東、有一洞窟。民、常放在農器。一日、有觀音磁像、安置之于石壇上。不知何處之人奉安于其中。即鄰里之人、大奇怪之、深爲尊信。而有求祈之人、必到此地而禱祈焉。則靈驗、捷乎影響焉：（後略）

この説話は続けて、租税を支払うためその身を売った妻が、普天間宮の觀音に助けられたことにより、後々人びとの崇敬を集めるようになった、という話と、人々に姿を見せず一室内に籠っていた女が、妹婿にその姿を垣間見られたことを恥じて普天間の洞窟内に失踪したことから信仰がはじまった、とする話の二通りの由来譚が付随している。また巷間には、以下のような伝承も流布している。

【資料4】「普天間宮由来譚」（口碑）

父と長男とが支那に行つた時の話である。或晩妹が睡眠中、大きな声を立て、もがくので、一緒に寝ていた母が、なぜそんなことをするのかと、一方の手をつかまへてゆり起こしたら、惜しいことをした、二人の乗つた船が、今難船にあつたところで、右の手で兄さんを助けて、左手でお父さんをつかまへようとすると、手が動かなくなつて、お父さんはたうたう助けることが出来なかつたと謂つた。程経て、支那にいつた兄から手紙が来て、行く途中難船にあつて、自分は助かつたが、父は溺死した、といふことであつたので、皆々びつくりした。^⑦

この口碑伝承は、琉球の基層信仰である「をなり神信仰」を説明する際によく掲出されるものである。琉球では、兄弟から姉妹を指して「ヲナリ」、姉妹から兄弟を指して「エケリ」といったが、「をなり神信仰」は、姉妹が兄弟に対して霊的な守護力を有する、とする琉球の宗教観であり、柳田国男が言うところの「妹の力」のようなものと解することができる。右記の伝承に加えて、たとえば、近年まで、旅をする兄弟に対して、姉妹が自らのティサージ（手巾）を贈るという慣行もしばしば見られたように、ヲナリの霊力とは、旅における守護力も発揮するものと信じられていた。

ところで、この普天間宮の由来譚は、媽祖（天妃）信仰に影響を受けたものと言われている。媽祖は中国南部・福建発祥の女神で、中国の民間、および世界各地の華人社会で広く信仰されるものである。一〇世紀後半ごろ、福建・莆田地方に禍福の予見に秀でた巫女がおり、彼女の死後、その霊力を信じていた人々によって祀られたのがその発祥という。また媽祖は航海安全の女神としても見られており、「天妃娘娘」「天后」「天上聖母」などと呼称されることもある。琉球でも唐人らの子孫の集落であった久米村に天妃宮が存在し、奉祀されていた。以下に媽祖の霊力を物語る話を掲げる。

【資料5】『天妃顕聖録』（一七世紀後半?）「機上救親」

何歳の時かわからないが、ある年の九月、父や兄たちが海にいった留守中に、機織りをしていた彼女（媽祖）が突如失神したので、驚いた母が慌てて呼びさますと、「お母さんが急に起こしたので、お父さんだけは救えたが、お兄さんは救う

ことができなかった」と恨めしそうにいう。母はわけがわからなかったけれども、くわしくは問い質さずにいると、暫くして、海上で大嵐にあったとき、父の乗った船は辛うじて沈没を免れたが、兄の船は怒濤に吞まれて、兄は溺死してしまつたという知らせが届いたという。また、沈みかけた船をみた媽祖が、数本の草を抜いて海に投げ込むと、その草が杉の大木となつてその船は沈没を免れた。^⑧

本話では媽祖が救済する対象が父と兄とで逆転してはいるが、普天間宮の由来譚とほぼ同工異曲であるといえる。その類似性からも推察されるように、口承の普天間由来譚は、「をなり神」信仰を背景に持ちながらも、説話としては一〇世紀に漢族の間で航海女神として信仰されていた媽祖の靈験譚からの影響を受け、これを利用したものだと思われる。しかし、琉球の「をなり神信仰」が中国から輸入されたものである、と言いたい訳ではない。両者とも女性の霊的な守護力を主とする信仰であるため、媽祖の靈験譚が普天間宮の由来譚としても受け入れられたのであり、また同時に、普天間宮の神にも航海守護神としての機能が賦与され、人々の崇敬を受けるようになった、とすることができよう。

2、航海守護神としての観音菩薩

ところで、この語り出しが近似する箕隅御嶽と普天間宮の由来譚に共通するのは、「洞穴」において「観音像」が唐突に出現している点である。洞穴は、琉球の民俗において「神靈坐す場所」と理解されており^⑨、いま現在も御嶽として崇信され

ている場所がいくつか存在する。また、両者とも、観音像をいつ誰がどのような経緯で洞窟内に安置したのかは説明されない。むしろ、像の出現が人為を介していない、という点で「神の示現」を強調しているという解釈も成り立つだろう。

つまり、箕隅御嶽が航海神として受容されるのには、そこに祀られた「観音菩薩」像が重要な役割を果たしている可能性がある。あるものと考えられるのだが、しかし、広く現世利益を求めるための祈願対象たる観音菩薩が、なぜ航海守護の力を持ち得るに至ったのだろうか。

先にも述べたように、東アジア社会、とくに中国において航海神として広く受容されるのは媽祖であった。琉球においても媽祖の信仰は厚く、航海の安全祈願に際しては、久米村の天妃廟に参詣し、また渡唐や江戸上りの船には「船菩薩」と称された媽祖像が積載され、信仰された。勿論、中国船にも同じように媽祖が乗せられてはいたが、実はその他にも「千里眼将」像や「順馬耳将」像、そして「観音菩薩」像も積載されていたという。⁽¹⁰⁾

なぜ観音像が航海守護の存在として船舶に積載されたについては、中国仏教界の四大名山のひとつである普陀山の信仰に係する。普陀山は浙江省の舟山群島内に位置し、一〇世紀以降、観音信仰の一大霊場となっていた。清代においては、媽祖の本拠である福建の湄州島と同様、近隣の漁船や商船が立ち寄って、航海安全を祈願する聖地であったのだ。そういった事情から、観音が航海神として受容され、船へと積載されることになった背景が思量できよう。

琉球における観音信仰の中心は「首里観音堂」である。琉球の史書である『球陽』（一七四五年）を見ると、この堂宇建立

のいきさつが以下のようにある。一六〇九年、島津に制圧された琉球国は、薩摩藩へ人質として王族や王府高官を送ることが義務づけられた（これは、琉球使節の「江戸立ち」前史と位置づけることができる）。人質の一人であった尚豊が、一六一六年に鹿児島へ赴いた際、父の尚久は、尚豊の無事の帰還を千手眼菩薩（千手観音）堂において祈り、尚豊が無事に帰国したならば、新しく「観音大士堂」を建立し敬愛することをもって立願した。その願意が成就してか、尚豊が無事に帰国したため、千手観音との契りを果たすため「首里観音堂」が新造され、以後、航海安全の祈願所として広く信仰されるようになった、という。⁽¹¹⁾

そのような経緯があったため、「はじめに」でも言及したように、進貢船や綾船出帆に際して、国王による観音堂参詣が制度化されていたと考えられる。そしてまた、その信仰は王府官人層に伝播し、鹿児島などの外地において観音像を購入し、家の守り神とした例が多数みられるという。⁽¹²⁾ さらには一般においても、真言宗配下の権現社において観音の霊験が強調されたことにより、観音堂や観音を祀る権現社への参拝が流行することとなった。⁽¹³⁾

そもそも琉球において、観音信仰をも含んだ所謂「権現信仰」が受容された年代は詳らかではない。琉球の「権現社」として著名なものは、先の普天間宮の他に、波之上宮、安里権現社、識名宮など、いわゆる「琉球八社」に列せられる神社である。それらの由来譚を分析すると、権現社はおおよそ一五〜一六世紀に成立し、もともと御嶽信仰の聖地であった場所に成立した可能性が高いと思われる。また、霊石が発見され洞窟内へ安置される、という由来譚の展開や、観音が祭

祀対象の中心となるという部分でも、これらは共通する要素をもっているといえよう。⁽¹⁴⁾

琉球における権現社に対する信仰は、日本ですでに神仏習合した真言宗系・熊野権現信仰とともに流入したことに、その起点を求めることができる。権現信仰の中心地であった紀伊国・熊野は、古くは日本古代の『古事記』や『日本書紀』に見えるように「根国・黄泉国の入り口」⁽¹⁵⁾他界であり、それ故に祖霊の集まる場所と想像されていた。さらに観音信仰の普及とともに那智山が観音浄土とみられたのに加え、熊野の遙か南に観音菩薩が住む「補陀落世界」を想定し、そこへの往生を求めた「補陀落渡海」が盛んに行われた場所でもある。一方、琉球の異界である「ニライ・カナイ」も、海の彼方にある死者の国・永遠の楽土とされており、熊野というトポス（場）と親和性をもったものといえる。

また、神仏習合によって重ねられた熊野三山の神・クマノムスミノカミの本地は千手観音、天照大神は十一面観音とされている。観音菩薩は純粹な仏教的觀念においては、必ずしも女性性をもつものではないが、天照大神は女神的存在とすることが可能であり、クマノムスミノカミも、神名の「ムスミ」（ムスヒ＝産霊）が示す通り、モノの生成を掌る「女性原理」をもった神とみられる。つまり日本の観音信仰の深層には母性的なものが内在されているといえよう。琉球においても、先の「をなり神」に代表されるように、その基層的宗教観における女性の霊力の優越が指摘される。つまり、日本で神仏習合し女性化された権現信仰における観音は、琉球古来の宗教観に親和性が高いものであったため、その受容がスムーズになされたと考えられるのである。

3、箕隅御嶽における「子安」の機能の発生

ここで再び箕隅御嶽の由来譚に立ち返ってみる。普天間宮の由来譚とはほぼ同型の語り出しをもって語られ、観音を奉祀するこの御嶽は、これまで考察してきた様々な信仰の重層化の末に、航海安全を祈願する神として後世に立ち現れたものと推測できる。しかし一方で、民俗において「子安」（安産祈願）の機能が発生した点は解明されないし、また、なぜ大和の船頭が拝殿の寄進に関わったのか、という説話解釈上の大きな疑問も解消されない。

まず、子安の機能の発生について考えてみたい。

この御嶽名称の由来となる「箕（み）」についてだが、嘉手納宗徳は「この洞窟が「み」に似ていることから、俗に「ミヌシミ」という」と述べている⁽¹⁶⁾。「箕」とは穀物の脱穀、選別に際して不要なゴミを吹き飛ばすためのバスケット状の農具である。沖繩の箕は「ミーズキー」と言い、日本のように片口ではなく、円形の平籠である⁽¹⁶⁾。つまりこの洞窟の呼称は、その洞窟内の様子が伏せたミーズキーのように、天井が低く、空間が円形に広がっているようなものを想像させる。しかし、筆者が実際にこの箕隅御嶽を調査したところ、当該の洞窟がそのように広い空間をもったものとは思われず、むしろ、この御嶽を遠望した姿が、平たい半球状のミーズキーを伏せた形に似ているために付けられた呼称ではないか、という印象を持った。

一方で、そのような御嶽の形状は、沖繩特有の墓様式である「亀甲墓」を想起させるものでもある。亀甲墓は、『沖繩民俗辞典』によれば「俗に母胎をかたどったものであるといい、人は死ぬと再びもとのところへ戻るといふ帰元思想のあらわれとい

われている」という⁽¹⁷⁾。箕隅御嶽は、ふたこぶの小高い丘をなしており、そこに横穴の洞穴が開いた形状は、女陰と母胎とを想起させるものと言いうる。

ところで筆者は以前、「箕」が日本民俗において聖なる対象として捉えられることがある、という教示を受けたことがある⁽¹⁸⁾。このことに関して、赤坂憲雄は「(東北の)箕作りは山の樹木を材料とする。…わらじを履いて木に登るな、二股の木は伐るな、お産の話はするな、といった禁忌が数多くあった」と指摘しており、箕には「呪術的な力があると信じられており、それが「妊娠や出産に関わるもの」であるとしてもいい⁽¹⁹⁾」のは非常に興味深い。日本の東北地方の事例ではあるが、箕隅御嶽における子安の機能の発生に重要な示唆を与えるものといえよう。

また、後方の洞穴に安置された「賓頭盧」の存在も子安と関連がある。賓頭盧とは本来、十六羅漢の一つで、日本の寺院では本堂の外陣に安置されるものである。俗に「ビンズル様」と呼称され、像を撫でて除災招福・子安を祈願する所では「撫で仏」とも言われる。沖縄では「ビジュル」と呼称され、真言宗僧侶の権現信仰布教により、海辺の石や、土中から出現した石を権現の神体として、男性が祀る権現勧請の形式をとる。この信仰は一七世紀ごろに沖縄本島中南部で受容され、次第に広まったといわれる。沖縄中部・沖縄市には、このビジュルを祀った泡瀬神社があり、現代でも子安神として信奉を集めている。さらに、ビジュルというものは、大概において細長い石棒状、人型状をした石であることから、日本の「金精様」のようにファルス(男根崇拜の対象と考えてもよいだろう。いずれにせよ「ビジュル」というものが、沖縄においても子安祈願の対象として

捉えられていることから、箕隅御嶽も民俗のレベルにおいて次第に子安神と見做されていった可能性が考え得る。

4、大和船頭による拝殿寄進について

次に、大和の船頭による拝殿の寄進について考えてみたい。ここで改めて言い添えておくが、箕隅御嶽の由来譚は、那覇の役人らによつて記された地方旧記類の一つである『那覇由来記』(一七〇九年)が、その初出と考えられる。それが王府編纂の地誌である『琉球国由来記』(一七一三年、以下『由来記』と略す)に転載、さらに『琉球国旧記』(一七三一年、以下『旧記』と略す)で漢文化され、最終的に王府の説話集である『遺老説伝』へと記載される、という経緯を辿っている。以下、この説話の生成・変遷を考えるため、これらの本文を年代順に並べてみる。

【資料6】『那覇由来記』「めいのすみの事」

後に当て岩穴あり、形ち箕に似たり、この故にめいのすみと名付と云えり、前の窟は仏様を安置すといへりとも破損して見へ給はず、其濫觴もしる事なし、石を崇てそ有、拝殿をも誰か建立と云事しれす。

【資料7】『琉球国由来記』卷十二「メイノスミノ事」

岩穴アリ、形ち箕ニ似タリ。故ニ、メイノスミト、云ヨシナリ。前ノ窟ニハ正観音ノ尊像ヲ安置シ、且、賓頭盧在ス也。誰人之建立シケルヤ、不可考知。拝殿ハ先此、運賃漕之諸舩頭ニテ、建立シケルトナリ。後之窟ニ、賓頭盧在ス。然レドモ、諸人無信仰由也。

【資料8】『琉球国旧記』卷六 「箕隅御嶽」

(在小祿郡儀間村。西北之間)儀間山之前。有一洞窟。形似箕器。峨然而高。昔有人。奉安正觀音尊像・寶頭廬于其中。至聖至靈。禱無不應。至乎近世。日本諸舵工。喜捐資貨。創造拜殿。且復有一洞。亦供養寶頭廬。而今無人崇信焉。

説話の変化部分に着目して整理すると、次の【表1】のようになる。

【表1】

書名	前窟	安置者	拝殿の寄進者	後窟
那覇由來記	仏様(現存せず)	不明	不明	?
琉球国由來記	正觀音像・寶頭廬	不明	運賃漕之諸舵頭	寶頭廬
琉球国旧記	正觀音像・寶頭廬	人	日本諸舵工	寶頭廬
遺老説伝	正觀音像	人	日本諸舵工	寶頭廬

右表を見れば、本来的な伝承には「観音」という語も、大和船頭による拝殿の寄進に関する説明も存在せず、それらは『由來記』によって突如記された、あるいは創作された、ということが明確となる。

ところで、『由來記』と『旧記』の間にある、「運賃漕諸舵頭」から「日本諸舵工」への記述の変化は、以下のような展開を想定しうる。この時代の琉球列島海域での海上交通は、基本的に大和船Ⅱ薩摩の公用船(薩摩の認可を受けた約一三艘の商船)と琉球の公用船に限られていた⁽²⁰⁾。さらに琉球・薩摩間における米などの上納品の運搬は、大和の商船によってほぼ寡占状

態となっていたという⁽²¹⁾。その輸送に際して、彼らには「運賃米」と称する輸送費が王府から支払われていたことが、『評定所文書』に掲げられた薩摩と琉球の「船法」を巡る海運紛争事案から読み取ることができる⁽²²⁾。つまり、王府が所有する船舶での運行であったのなら、輸送費の支払いは生じず、「運賃漕」と明記される場合は、当然それが「日本(大和)人」の船頭のことである、という論理が成り立ち、このような改変に至ったのではなからうか。

さらにここで、後世における伝承の変化も確認しておく。『字鏡水創立百周年記念誌』には、箕隅御嶽に関して「二五四年、麻氏五世 儀間親雲上真命によって建立され正観音を本尊とする」との説明がある⁽²³⁾。これは、一八九二―一九〇四年頃に記された『玉城大城由來記』に見える伝承を基に述べられたものと思量される。この『玉城大城由來記』は「麻氏の系祖以前の元祖に関する、玉城大城での諸由來を中心に編集したもの」であり、「家譜等に記載できない先祖の由來伝承をとりまとめ、真偽を吟味して、門中としての見解を記したもの」とされている⁽²⁴⁾。本書は麻姓儀間氏の来歴や伝承を知る上では貴重な資料と言えるが、一方で、伝承の有力な証拠として「神おこで」と呼ばれる門中内の巫女の証言を基にするなど、事実の認定手段として宗教的、かつ伝説的な部分が多く見受けられる点は注意が必要である。また、王府が校閲・管理した門中の歴史書である「家譜」には非掲載の伝承が多いことも、本書の記載内容の信頼性に一考を要する。その『玉城大城由來記』に見える箕隅御嶽の由來とは、以下のようなものである⁽²⁵⁾。

儀間氏の五世・真命は、尚清王代に南蛮へ使者として赴いた。

嘉靖二五年（一五四六年）、帰国の途次、那覇近くで夜となつてしまい、港の入り口が解らなくなり、船員達が混乱状態となつてしまった。真命が心を込めて祈願すると、忽ち一つのかがり火が現れて、海上を照らしだした。かがり火は、船が移動するとその船を導くように先へ先へと次々に移動し、西の方の高い森に移つて四方を照らしたのち、瞬く間に掻き消えてしまった。真命は、きつと神の助けだと思い、これを尊信してその恩に報いようと、後日心当たりの場所を探すと、果たして一つの岩穴があつて、靈氣に満ちあふれていた。真命はこの岩穴に観音像を安置し、また拝殿を創建して毎月参詣してその恩に報いた。

本伝承は、王府が編纂した『由来記』から『遺老説伝』に至る、いわばパブリックな伝承のいずれとも全く相容れないものであることがわかる。つまり、王府のテキスト類においては、右記の麻姓儀間家に伝わった伝承を伝聞・参観した可能性が薄いといえ、また本伝承が年代的にも王府のテキスト類より後代に編纂されたものであることから、儀間氏の子孫らが自らの祖先を称揚する目的で、箕隅御嶽の拝殿の創建者を「儀間真命」に結びつけた可能性が考えられる。ただ、この御嶽が儀間氏と深い関わりがある旨が示唆されている部分は注意を要する。「はじめに」で述べた、近代まで箕隅御嶽を奉斎していた「宗家筋」とは、麻姓儀間氏のことであつた可能性が高い。

このように儀間氏における近代の伝承では、拝殿の寄進者はその祖先である「儀間真命」とされているが、一方で王府の公的なテキストである『由来記』では、どのような事情があつて、拝殿の寄進者を日本の船乗りとしたのであろうか。伝承変化の

原因に関して、まず考え得るのは、『那覇由来記』の成立から『由来記』の成立までの約四年間で、日本の船頭が実際に拝殿を寄進したという出来事があつたのではないか、ということである。『由来記』の「先此」という文言が、時間的な近さを感じさせるものであることは、その可能性の高さを伺わせる。その際に注目されるのは、『那覇由来記』「めいのすみの事」に並べて記載された以下の記事である。

【資料9】『那覇由来記』「住吉の事」

神体は石にておはします、然れども開基知人なし、宮は順治十六年再建すと見ひたり、其棟文曰（棟文省略）

拝殿を康熙三拾五丙子麻氏儀間親雲上、薩州の住川内の大郎右衛門両人主取て勧進にて再建立すと云り

箕隅御嶽の由来と住吉神社の由来とが、『那覇由来記』において連続して並べられた記事であつた点、また【資料9】の最終段に、康熙三五年（一六九六）に、「麻氏儀間親雲上」と「川内の大郎右衛門」（『球陽』では「日本商民」）が資金を出し合つて拝殿を建立した、とある点は注目に値するだろう。さらに、先の『玉城大城由来記』において箕隅御嶽に「儀間真命」が関連付けられたのと同様に、住吉神社も「麻姓儀間氏」に関連の深い聖所であつたことも重要である。つまり、箕隅御嶽の伝承は、住吉神社の由来譚に引きずられる、あるいは連動するかたちで、その拝殿の寄進が日本商船の船頭よるものと付会された可能性が考えられるのではなからうか。

しかし、この両者がともに儀間氏と関連するものの、そのように場所が異なる「神社」と「御嶽」の伝承が混同、あるいは

付会されたのか、という疑問は残る。それを考えるためには、伝承を変化させた張本人である『由来記』編者が、箕隅御嶽と日本人を結びつけるに至った心性を考える必要がある。

5、箕隅御嶽由来譚の成立背景

先にも述べたように、この箕隅御嶽が麻姓儀間氏の領地内にあったことに注目したい。麻姓儀間氏は、大城按司真武を始祖とする古い歴史をもった門中として知られる。麻姓の大家が首里へと居地を移すのは、十一世の渡嘉敷親雲上真仲の代(十八世紀初頃)からで、それ以前は、小祿間切・儀間村が一族の定住の地であった。その一族のなかでも、先述した儀間真命の三男・六世儀間真常は、琉球産業界の大恩人として知られる人物であり、彼もまた生涯を儀間村で過ごした人物であった⁽²⁶⁾。

真常の功績は以下の三つに集約される。①野国総官が中国より持ち帰った蕃薯を琉球全土に普及させ、琉球の人々を飢饉から救った。②島津侵入によって尚寧が薩摩へ連行された際、それに従ってともに薩摩へ渡り、木綿の種と織物(絣)の方法を持ち帰って伝えた。③儀間村の人間を中国に派遣し、黒砂糖の製法を学ばせた。

箕隅御嶽の伝承の変化を考えるなかで注目されるのは、②と③の事績である。②に関しては、以下のような伝承が『球陽』にみつかる

【資料10】『球陽』附卷一

麻平衡(儀間親方真常)、勢頭役と為り、聖主に扈從して薩州に到る。辛亥の年に至り、帰国するの時、木綿種子を帶び

回り、之れを国中に播う。此の時、日本の女二人、泉崎村に寓す。平衡、他の二女を呼びて、綿布大帯を織造せしむ。而して本国の木綿は、此れよりして始まる。

この記事には、当時、那覇の泉崎村に居住していた「日本の女二人」が儀間に呼び寄せられて、木綿織りに従事したとある。彼女らが一体どのような存在だったかは不明であるが、彼女らがわざわざ「儀間」に呼び寄せられ、織物業に従事したということは、当時からこの地域がヤマトと何らかの関係を有する場と見なされていた、ということが想像し得る。

また、真常という人物は、島津侵入によって薩摩に連行された尚寧に随行した後、無事帰国を果たした存在であったことも注目すべきであろう。先に取り上げた『玉城大城由来記』には、この箕隅御嶽に麻姓儀間氏の祖先筋の墓があったとする伝承も載せられている⁽²⁷⁾。をなり神と同様、先祖が霊的に子孫を守護するというのは、琉球の御嶽信仰の基層をなすものでもあり、また同時に、日本からの無事の帰国という事績は、先に掲げた首里観音堂の創建由来とも重なるものといえる。つまり、儀間氏の領内にある先祖崇拜の御嶽は、ヤマトから無事帰国した真常を祀る場所と目されており、それ故にその子孫達にとって、航海安全の祈願対象と見なされたことは当然の帰結といえる。

ところで、近年、先の住吉神社を請来した人物を「儀間真常」に付会する説が見られるが、『那覇由来記』に記載される住吉神社の棟文に「原夫曩昔開基、不知何世何年誰人也」とされているのはじめ、王府のテキストにも、麻姓儀間氏関連の文書(田名家文書)にも、その開基を「真常」と明言したものは存在しない。しかし、薩摩と琉球を往還した儀間某で、日本との

関わり合いの深さに鑑みると、一般においても「儀間真常」の名がある種のキーワードとして思い浮かぶことは想像に難くない。そのために、このような伝承の付会が行われたものと考えられよう。

また加えて、③の黒砂糖は、真常がその製造法を中国から輸入したことによって、沖縄の農業と産業とを大きく変革させることとなったものである。砂糖は、薩摩からの借用金返済のため、その商品価値の高さに目を付けた当間重陳らの提言によって、一六五二年、王府による専売が始められたことにより、王府の管理下で基幹作物へと成長していったという⁽²⁸⁾。砂糖は換金性の高い作物・商品として、近世期を通じて王府の財源を支え続けたが、それだけにとどまらず、薩摩の経済をも支えていたとされる。これら②、③の事実を併せて考えれば、儀間真常という人物と、彼の地頭地であった儀間・垣花地区というトポスを核として、綿栽培・砂糖に絡んだヤマト世界との浅からぬ関係性が見えてくるのである。

さらに、日本人にとつての航海守護という視点からもこの伝承を考えてみたい。そもそも、『資料9』『住吉の事』において、なぜ大和船頭である「川内の大郎右衛門」が、住吉神社の拝殿の建立に関わっていたのだろうか。

薩摩・琉球間の往来における海難事故は、大和の船頭達にとつても是非とも避けたい事態であった。琉球の上納品輸送を独占し利益を上げていた彼らではあったが、もし難船した場合は、当然その補償責任を負うことになる。上納米の「破損」や「濡れ米」は、自らの運賃米で補填する必要がある⁽²⁹⁾、また沈没によって全損となった場合は、莫大な経済的負担を強いられたことは想像に難くない。そういった所から、日本の航海守護神

として名高い住吉大神に、大和の船頭がその守護を祈念して拝殿を寄進した、ということは充分に考え得る。また同じように、海域を守護する箕隅御嶽のような琉球の神に大和船頭が祈ることも、当然あつてよいことである。このことについては、冒頭に指摘したように、大和の船頭も難船時に間得大君に立願し、これが叶うと龍樋の水や青銅などを捧げて結願した、という事例が補強する。またそこから、箕隅御嶽における大和の船頭の拝殿寄進、という伝承が生じた可能性は充分に考え得る。

最後に、大和船頭による寄進を明文化した『由来記』についても考える必要がある。『由来記』という書の性質や編纂理由は、その名が示すとおり、琉球に存在するモノ・コトの「由来」を通して、琉球国の国家としての自意識を確立するという部分にあつたと考えられる⁽³⁰⁾。そのような成立背景に鑑みれば、本書による箕隅御嶽由来譚の改変の裏には、琉球列島の海域を運行する日本人でさえも琉球の航海神を信奉するのは当然であり、また琉球とはそのような神を奉斎する海洋国家である、という「誇り」、あるいは在地の神の存在を通じた自意識の確認が潜んでいるのかもしれない。

そしてまた、この箕隅御嶽の所在する儀間村とは、先述した通り、儀間氏を通して、ヤマト世界との浅からぬ関係性を持ったトポスである。さらに儀間村の住吉神社へ日本人が拝殿を寄進した前例があるという事実に関連づけて、箕隅御嶽の拝殿についても、誰とも知らない余人ではなく、あくまで日本人の寄進として積極的に付会しようとした、そのような『由来記』編者の思惑が、この伝承を改変させたのかもしれない。

おわりに

以上、琉球における海難事故の際の儀礼で浮上した「めのしん」という御嶽が、航海守護や子安という機能をどのようにして持つに至ったのか、また、伝承中に大和船頭による拝殿の寄進の文言が如何にして入り込んでいったのかについて、民俗事例、口頭伝承、テキストの分析を通して考察した。

ある時代まで在地の門中によって細々と祭祀されていた箕隅御嶽が、後年には全琉球的に広く知れ渡るような航海守護の神として立ち現れるのは、『琉球国由来記』による伝承の発見と、内容の改変・意義づけによるものが大きかったものといえよう。それが幾度も転載された結果、『遺老説伝』が語る〈民間伝承〉として結実していったのである。しかし、本伝承はそこで固着し原典化するのではなく、様々な人びとの思惑や願いを巻き込みながら絶えず変転・成長し、今に至ったものとする事ができる。

また、近世琉球のテキスト類については、当時の民俗の実態を正確に反映したものとするべきではなく、史書や説話編纂者の解釈下に置かれ、コントロールされたものであったと見做すべきであろう。そのような琉球のテキスト類の特性を踏まえたいえで、伝承の転載過程、および後代の変化も丹念にたどりながら、一つ一つを丁寧 to 評価する必要がある。

【注】

- (1) 『頭役被仰付候以来日記』は、現在琉球大学附属図書館の宮良殿内文庫に収蔵されている。
- (2) 豊見山和行「航海守護神と海域―媽祖・観音・聞得大君」

(尾本恵市ほか編『海のアジア5 越境するネットワーク』 岩波書店 二〇〇一年)

- (3) 注(2)による。
- (4) 注(2)による。
- (5) 平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』第一書房 一九九〇年
- (6) 掲載本文は、嘉手納宗徳編著『球陽外巻 遺老説傳 原文・読み下し』(角川書店 一九七八年)による。
- (7) 伊波普猷『をなり神の島』楽浪書院 一九三八年
- (8) 『天妃顕聖録』の成立は明末・清初頃と考えられる。翻訳本文は窪徳忠『沖縄の習俗と信仰』(東京大学出版会 一九七一年)に掲げられたものを利用した。
- (9) 拙稿「外巻『遺老説伝』と『球陽』―「異界」表現をめぐって―」(古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考』第二十一集 新典社 二〇〇八年)
- (10) 注(2) 参照。
- (11) 『球陽』附卷一、尚寧王三〇年条による。
- (12) 注(5) による。
- (13) 注(5) による。
- (14) 加治順人『沖縄の神社』ひるぎ社 二〇〇〇年
- (15) 嘉手納宗徳編著『球陽外巻 遺老説傳 原文・読み下し』角川書店 一九七八年
- (16) 沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』(沖縄タイムス社 一九八三年) 掲載「ミーズキー」項による。
- (17) 渡邊欣雄ほか編『沖縄民俗辞典』(吉川弘文館 二〇〇八年)、「亀甲墓(かめのこうばか)」項による。
- (18) 元明治大学・故永藤靖教授の口頭指摘による。
- (19) 赤坂憲雄『東西／南北考―いくつもの日本へ』岩波書

- 店 二〇〇〇年
- (20) 真栄平房昭「薩摩藩の海事政策と琉球支配」(柚木学編『日本水上交通史論集 第5巻 九州水上交通史』文献出版 一九九三年)
- (21) 豊見山和行「琉球列島の海域史研究序説…研究史の回顧と二、三の問題を中心に」(『琉球大学教育学部紀要』(68) 二〇〇六年)
- (22) 豊見山和行『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館 二〇〇四年
- (23) 鏡水創立百周年記念事業記念誌発行部編『字鏡水創立百周年記念誌』鑑水郷友 二〇〇五年
- (24) 田名真之編『時代を拓く儀間真常―人と功績』(那覇出版社 一九九四年)の資料篇〈解題〉による。
- (25) 注(21) 資料篇所収の『玉城大城由来記』『五世儀間真命公の由来』条に依り、現代語訳して内容を纏めた。
- (26) 多和田真助『門中風土記』沖縄タイムス社 一九八六年
- (27) 注(21) 資料篇所収の『玉城大城由来記』『麻(真) 儀公世代 箕隅森御墓拝ミ初の由来』条に依る。
- (28) 真栄平房昭「砂糖をめぐる生産・流通・貿易史―幕藩制市場と琉球の視点から」(齋藤善之編『新しい近世史3 市場と民間社会』新人物往来社 一九九六年)
- (29) 注(19) による。
- (30) 拙稿「『由来』から『旧記』へ―地方記事編纂における『琉球国旧記』の態度―」(木村淳也『球陽外巻 遺老説伝』本文と研究(学位請求論文) 二〇一三年)による。同趣旨のことは拙稿「琉球史書の特質と問題―東アジア国際関係を軸として」(増尾伸一郎

編『知のユーラシア5』 明治書院)でも既に述べている。

【参考文献】

平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』第一書房 一九九〇年
田名真之編『時代を拓く儀間真常―人と功績』那覇出版社 一九九四年
尾本恵市・濱下武志・村井吉敬・家島彦一編『海のアジア 5 越境するネットワーク』岩波書店 二〇〇一年
豊見山和行『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館 二〇〇四年

【本文引用】

『球陽』：球陽研究会編『球陽』 角川書店 一九七四年
『遺老説伝』：嘉手納宗徳編『球陽外巻 遺老説伝』 角川書店 一九七八年
『那覇由来記』：那覇市企画部市史編集室編『那覇市史 資料篇』第一巻一二「近世資料補遺・雑纂」 二〇〇四年 那覇市役所
『琉球国由来記』：外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』 角川学芸出版 一九九七年
『琉球国旧記』：横山重他編『琉球史料叢書 三』 東京美術 一九七二年